

「藁の中の七面鳥」の系譜（その一）

櫻井雅人

一 はじめに

「藁の中の七面鳥」は、日本ではフォークダンスの「オクラホマ・ミクスチャー」として知られている曲の原曲であり、これは一八三〇年代アメリカのミンストレル・ソング「ジップ・クーン (Zip Coon)」（「オールド・ジップ・クーン」ともいう）を作り変えたものである、というのが通説である。しかし、そこからさらに遡ろうとすると、多くの研究者はイギリス諸島に源流があると述べているが、具体的な地域や曲となると諸説紛紛としており、「いずれ」の候補の曲⁽¹⁾も明白なる先行例 (precedent) とは思えない⁽²⁾とも言われてきた。それは、候補に挙げられてきた曲は部分的には「似ている」ということができて、曲の系統を

決定できるほどの内的・外的証拠がそろわないためであろう。それならば、「原曲不詳」とするのが正しい結論であろうか。

そもそも楽曲において「同じ」とか「関連がある」という判断は容易ではない。系譜とは関連性であって類似性とは限らない。関連があるとされる曲でさえも気が付かないことはしばしばある。たとえば、「アイルランドの洗濯女」と「スキップ・トゥー・マイ・ルー (Skip to My Lou)」を挙げることができる⁽²⁾。「七里ガ浜の哀歌」が「ナンシー・ドーンソン (Nancy Dawson)」に遡ることができる⁽²⁾と、「桑のまわりを踊らうよ (Here We Go Round the Mulberry Bush)」および「3艘の船を見た (I Saw Three Ships)」とは縁戚関係にならう⁽²⁾。あるいは、もっと不確か

な例を挙げるならば、「アメイジング・グレイス」と「鉄道唱歌」も、もしもそれぞれが「ロッホ・ローモンド」と関連ないし影響関係があるとするならば、遠い類縁があることになろう。⁽⁴⁾だが、たとえそのようなことが「立証」されたとしても、関連よりは違いが重視されるであろうし、また、音楽が文化であることを認めるならば、部分的な類似を指摘するだけでは、たいした意味を持たない。ことに、民俗的な文化であれば、必ずどこかはリサイクルされているわけであつて、まったくの新作はありえないだろう。もちろん、類似性は旋律のみに当てはまるのではない。旋法、リズム、和声、テンポから、演奏スタイルやコンテクストに至るまで、類似性を認めることができる。以上のような観点から楽曲の系譜を考えるとしたら、旋律のみの類似を比較することは極めて限定された論議となる。しかし、限られた資料の中では旋律以上のことは検討しにくいし、そこにオリジナリティーが顕現されるという視点も誤っているとはいえない。オリジナリティーそのものは民俗文化ではそれほど重要な要素ではないが、体系(旋法、和声など)⁽⁵⁾とは違って個々の要素(旋律・歌詞など)は伝承されやすいだけに、文化の伝承という側面を知るには大きな手

掛かりとなる。

二 「ジップ・クーン」

「ジップ・クーン」は代表的なミンストレル・ソングの一つであるから、現在でも、少なくともその名称はかなりよく知られている。特にステレオタイプの黒人像を描いた歌として、「ジム・クロー」とともに、しばしば引き合いに出される。⁽⁶⁾ジュームズ・ファルドによれば、「ジップ・クーン」は一八三四年頃に五点の楽譜が出版されていて、それらの中でどれが先なのかは判然としない、⁽⁷⁾と云う。特に注目すべきと思われる二つの版はいずれも復刻されているので、まずはそれらを見ることにしよう。

フォスター・デイモン編『古いアメリカ歌謡のシリーズ』(第二〇番)にファクシミリ版で収録されているのは、ニューヨークのアトウィルズ・ミュージック・サルーン社(Arwil's Music Saloon)から出版されたミュージック・シートであり、表紙に印刷された文言によればエンディコット&スウェット(Endicott & Swett)によって、また楽譜ページの文言によればトマス・バーチ(Thos. Birch)によって、一八三四年に登録された。⁽⁸⁾前者二名は表紙のリ

(3) 「墓の中の七面鳥の系譜」(その一)

ソングラファアであり、後者とアトウィルとの関係は「バーチの印刷用プレートはジョーゼフ・アトウィルが同時に使用した⁽⁸⁾」という事情によるものである。ファルドによると、議会図書館の版權登録の正確な日付は一八三四年四月二九日とされている⁽⁹⁾。

表紙には、精一杯にめかしこんだ黒人のダンディーが大きく描かれており、楽譜ページ上部には「ジップ・クーン (Zip Coon)」というタイトルとともに「有名なコミック・ソング、驚くほどの喝采を得てすべての名高いコミック・シンガーに歌われているもので、ピアノフォルテに作曲・編曲」と書かれている。歌詞は七番まであり、調性はト長調でピアノ伴奏が付いている。

もう一点は、ニューヨークのヒューイット社 (J. T. Hewitt & Co.) から出版されたものであり、リチャード・ジャクソン編『一九世紀のアメリカのポピュラー・ソング集』に復刻されている⁽¹⁰⁾。シートに発行年が書かれていないので特定できないが、ヒューイット社が楽譜に記載された住所 (ブロードウェイ一三七番地) で営業したのが一八三〇〜三五年であることから、その期間に出されたものと推定される。ジャクソンが「一八三〇年から一八三五年

の間」と言うのは、これを根拠としたものであろう。ただし、別の箇所では「一八三五年ころ」とも言っている⁽¹²⁾。これに対して、ジョン・フィンソンは「一八三三年ころ」あるいは「一八三二年ころ」と矛盾した記述をしているが、いづれにしてもその理由は述べていない⁽¹³⁾。

表紙には「ジップ・クーン、お好みのコミック・ソング (Zip Coon: A Favorite Comic Song)」と書かれている。大きなジップ・クーンのイラストレーションの下には、「デイクソンによつて歌われた (Sung by G. W. Dixon)」と示されている。このイラストレーションの構図と絵柄はアトウィル版とほとんど同一であるが、顔つきが少し違っていることなど、細部ではそこしこに相違があり、別の版下による挿絵である⁽¹⁴⁾。明らかに一方が写し取ったものである。この当時「たいていの場合、同じ歌謡であれば表紙イラストは次々と複写された⁽¹⁵⁾」という「慣行」があったので、どちらかが堂々と盗用したようである。現物を見なければ確定的なことはいえないが、復刻版(および他の写真版)から判断する限りでは、ヒューイット版のほうが輪郭や濃淡がはっきりしたもので「書き直し」という印象を受ける。リソングラファアについては「エンディコットのリソ、

ブロードウェイ三五九番地」と小さく書かれており、ジョージ・エンディコット (George Endicott) がこの番地で営業をしたのが一八三四から三九年ということになると、楽譜の出版が「一八三二年ころ」とか「一八三三年ころ」という前記フィンソンの主張は難しくなってくる。

アトウィル版に書かれている「エンディコット&スウェット」名での活動は「エンディコット」名よりも前のことで一八三二から三三年とされている。⁽¹⁷⁾アトウィル版にははつきりと「一八三四年」と書かれていて年代が一致しないが、二人の活動時期と営業地の移転順序が記録どおりであるとすれば、アトウィル版のほうが古いことになる。よつて、「一八三四年に初めてアトウィル社から出版され、すぐ後に続いてヒューイット社などからいくつかの版が出た」とするのがもっとも無理のない推定であろう。

歌詞(黒人英語を模した綴りのノンセンス・ソング)は同じく七番までであるが、四く六番は違っている。アトウィル版は、ジャクソン将軍が登場したり、ジップ・クーンが大統領に、デイヴィー・クロケットが副大統領になることを想定した荒唐無稽なものである。⁽¹⁸⁾この二版の主旋律はほぼ同一である。伴奏はアトウィル版がより多くの分散和音

や付点音符を使っているのに対して、ヒューイット版は和声を付ける程度に伴奏が簡素化されている(より一般向けということになる)。いずれにも二小節の後奏があり、アトウィル版が歌の末尾旋律を繰り返しているのに対して、ヒューイット版には異なった旋律が付けてある(ヒューイット版には終わりから三小節目の音符に誤りもある。ハ音は正しくは二音。両者とも、歌の五小節目の一六分音符が八分音符に、あるいは八分音符が付点八分音符という誤りがある)。全般的には「菓の中の七面鳥」あるいは「オクラホマ・ミクサー」とだいたい同じ旋律とみなすことができるが、末尾四小節には大きな違いがある(もちろん、演奏スタイルはさらに相違が大きいだろう)。以下に見るように、同じく「ジップ・クーン」といつてもいろいろな版があるし(また、「菓の中の七面鳥」のほうははるかにヴァラエティーに富んでいて違いが大きい版がある)、⁽¹⁹⁾同一ではないとしても「メロデイがハッキリ違う」とまでは言い難い。しかし、民俗音楽のようにヴァリエーションの大きいジャンルの音楽では、この程度の相違は「同じ曲」の範囲内である。

この他にも、シート・ミュージックとして幾種かが出版

されている。未見であるが、ボルティモアのG・ウィリッ
グ・ジュニア (G. Willig, Jr.) が出版したものである。こ
れは「流行のニグロ・ソング、大喝采を博してデイクソン
氏が歌ったもの」とされて、黒人のカッブルを描いた表紙
(²¹)でも「エンディコットのリソ」と九番までの歌詞が
あり、出版年代は「一八三四年ころ」とされている。⁽²²⁾ 同様
なものをニューヨークのファース&ホール社 (First &
Hall) も出して⁽²³⁾いる。デイクター&シャピロおよびファ
ルドははつきりと述べていないが、ジップ・クーンは全身
像でなかったり、歌詞がさらに長いことなどから、これら
は後から作られた版であろうとの含みが読み取れる。また、
一八三七年には「変奏曲」と「カドリーユ」が、一八六〇
年には「シヨティッシュ」が出版されている。⁽²³⁾ 演奏形態か
らするとこれらは「オリジナル」よりも現在の「藁の中の
七面鳥」や「オクラホマ・ミクスサー」にやや近づいている
ところがあるろう。

「ジップ・クーン」が大いに流行したことはステイヴ
ン・フォスターの伝記でも伝えられている。一八三五年に
当時九歳のステイヴンが自分たちで結成した少年劇団
(thespian company) でこれを含むミンストレル・ソング

を歌って喝采を受けたことを、弟のモリスン (Morrison)
が語っている。⁽²⁴⁾

「ジップ・クーン」の原作者については当初から論議が
あった。⁽²⁵⁾ ジョージ・ワシントン・デイクソンの他にも、ボ
ブ「ロバート」・ファレル、ジョージ・ニコルズが「作者」
として名乗りをあげた。⁽²⁶⁾ しかし、中でもデイクソンは歌い
広めた貢献者であり有力な候補とされることもあるが、彼
が作者ではないことはほぼ定説と言ってよからう。デイク
ソンは一八三四年に初めてこの歌を歌い始めたが、一八三
三年にジョー・カウエルと巡業をしたボブ・ファレルは一
八三三年にはワシントンとボルティモアの劇場でこの歌を
おそらく歌っていたであろうし、一八三四年四月四日に
ニューヨークのリッチモンド・ヒル劇場で「ジップ・ク
ーン」というニグロ・ソング」をパーマー氏 (a Mr. Palmer) と
いう人が歌った。デイクソンが歌ったという記録はその後
になつてからのことである。⁽²⁷⁾

「ジップ・クーン」の楽譜は名声のわりにそれほど多く
の歌集等には収録されていないし、一九二七年に「原歌詞
はめつたに聞かれない」と言われている。⁽²⁸⁾ すでにミンスト
レル・ソングを歌う機会はなく歴史的な記録以外に必要性

がない歌であろうし、旋律も「藁の中の七面鳥」と同じであればわざわざ提示する必要もない、ということかもしれない。しかし、それでも復刻以外にいくつかの再録版があり、若干の相違があるので紹介しておく。コックレル『無秩序の悪魔たち』⁽²⁹⁾はアトウィル版の主旋律のみを、ハンス・ネイサン『ダン・エメットと初期ニグロ・ミンストレル』は「一八三四年版」(アトウィル版であろう)からコーラス部分を省略して主旋律を示したものである。⁽³⁰⁾箇所は違いますが、いずれも付点音を修正しており、また、後者は歌詞中の coney の綴りを coney と変更している。『アメリカン・ヘリテッジ歌集』所収の「オールド・ジップ・クーン (Old Zip Coon)」は、前奏・後奏がなく新たな編曲のピアノ譜が付けてあり、旋律はほぼ同じであるが、コーラス部分以外では付点音を使わない平板なリズムで示されているところが多く、この点ではかなり違う。歌詞は、ヒューイット版からのものであるが、四〇二〜三〇五番の順序で一番がない。レスター・レヴィ『アメリカ史の装飾音』に掲載の楽譜(『Zip Coon』)は主旋律のみでコーラス部分を省略した(そのことは述べていない)ものであり、出典は書いていないが、その前のページにあるイラストは

ヒューイット版から、歌詞はアトウィル版からであろうと思われる。五小節目と八小節目の音符に誤りがある。⁽³²⁾シグムンド・スベイス『リーデム・アンド・ウィープ』に掲載の「ジップ・クーン」は、ヒューイット版からと述べているが、主旋律のみを示してコーラス部分を省略して、調性はへ長調に移してあり(ト長調では一般の人にとって最高音のト音が歌いにくいためであろうか)、歌詞は同じであるが、三小節目と十六小節目の音符が違う。また、ここでもコーラス部分を省略している。⁽³³⁾リンスコット『古きニューイングランドの民謡集』は二〇世紀のコントラダンス曲としての「オールド・ジップ・クーン」である(「藁の中の七面鳥」とは別に収録⁽³⁴⁾)。

レコードに録音された「ジップ・クーン」は、さらに「藁の中の七面鳥」に類似している。『初期ミンストレル・ショー』はダニエル・キングマンが「推奨に値する忠実な再現⁽³⁵⁾」と評するレコード演奏であるが、ここに収録の「オールド・ジップ・クーン」は、末尾四小節も含め、旋律は「藁の中の七面鳥」である。また、『街中の音楽』に収録されたキャビネット・ペイパーロール・オルガンの「オールド・ジップ・クーン」も同様である。⁽³⁶⁾これに対して、「藁

(7) 「菓の中の七面鳥の系譜」(その一)

の中の七面鳥」と題していても末尾の旋律からすると「ジップ・クーン」の特徴を維持しているものもある。⁽³⁷⁾

「ジップ・クーン」よりも「菓の中の七面鳥」のほうが古いという見解もある。ファン・デル・マーヴエは「一七三七年のこの引用文よりも一〇〇年ほど後に」有名な「ジップ・クーン」は、「菓の中の七面鳥」として一般に知られているアイルランド風な響きがする耳に残りやすい曲に合わせて印刷に付された⁽³⁸⁾。と言う。しかし、「菓の中の七面鳥」という名称は別の歌に付けられていたもので、一八六一年にダン・ブライアント(ダン・エメットも参加していたブライアンツ・ミンストレルの座長)によって初めて登録された(ニューヨークのH・B・ドッドワース社が出版)。これは歌詞旋律ともに「新作」で、末尾に「ジップ・クーン」の旋律が「古い旋律(Old melody)」として付されている⁽³⁹⁾。つまり、この記録が最初であるとするならば、「菓の中の七面鳥」なる名前は別の歌から移行したものであった。「ジップ・クーン」が大いに流行したこの間(二七年間)に、「ジップ・クーン」ではなく、「菓の中の七面鳥」のほうの作者が現れなかったことからすると、少なくとも当時の関係者は「ジップ・クーン」が原曲

であるという認識はあったと思われる。ブライアントは「ジップ・クーン」の「作者」(あるいは版權登録者)を知らなかったのか、知っていても無視したと思われる。数人が版權を主張した曲であるから「無視」してもかまわない、と考えてさりげなく曲を付け加えたのかもしれない。ケン・エマソンは「ジップを風刺して」学識ある学者先生(learned scholar)と描写している点を除けば、歌詞の大部分は「菓の中の七面鳥」と同様に南部の田舎風に思える。こちらは田舎のリールであって、ジップ・クーンのメロディーを保存している(そして、多分それに着想を与えたのであろう⁽⁴⁰⁾)。と言うが、かなり特徴的である末尾四小節を見る(あるいは、聞く)限りでは、「ジップ・クーン」が「菓の中の七面鳥」から着想を得たとも考えにくい。もしそのように主張できるとするならば、「ジップ・クーン」登録以前に「菓の中の七面鳥」の原型(prototype)が存在していたはずだが、それは「菓の中の七面鳥」と呼べる曲として確立していたか、はなはだ疑わしいと言わざるをえない。

「ジップ・クーン」がはたしてアフリカン・アメリカンのオリジナル曲であるのか、という疑問はかなり前から出

されていたようである。一八六七年に出版された初めての黒人霊歌集であるウィリアム・フランシス・アレン等の『アメリカ合衆国奴隷歌謡集』の序文では、「30年以上前にこれらのプランテーション・ソングが登場して、しばらくは異例なほど流行した。もし「コール・ブラック・ローズ」や「ジップ・クーン」や「旧きヴァージニーは飽きることなし」が、我々の社会のどこかしらセンチメンタルな好みに合わせて作られたまがい物の模造品に引き継がれてきたとするならば、これらが「ニグロ・メロディー」と呼ばれた事実それ自身が黒人の音楽的天分への賛辞である⁽⁴¹⁾」と言う。この歌集に対する「リッピンコッツ・マガジン」誌に掲載された無署名の書評で、評者は「ジム・クロー」とか「ジップ・クーン」などこの種の曲が、いかに貧困なものであっても、プランテーションのアフリカ人が作曲したという主張を信じることはできない⁽⁴²⁾」と言う。一般にはミンストレル・ソングはアフリカン・アメリカンの音楽とみなされて、しばしば「ニグロ・ソング」と呼ばれていたし、ミンストレルとスピリチュアルの相違さえも理解されていなかった⁽⁴³⁾ので、このような論議がなされたのである。この疑問は二〇世紀になっても続く。一九一四年

にクレイビールは「クリステイズ・ミンストレルズや他のミンストレル劇団が国中を持って回った歌のさらに直接の先祖は南部の黒人に帰せられている。「コール・ブラック・ローズ」とか「ジップ・クーン」とか「旧きヴァージニーは飽きることなし」などの歌は常に黒人たちの創作として受け取られてきた。ただし、私にはそれらが本当に黒人たちの創作なのかわからない。控えめに言っても、この問題に対してまったく証拠がないという理由だけで、私は懐疑的なのである⁽⁴⁴⁾」と説明する。一九二七年になっても「ジップ・クーン」は「最も古いアメリカのニグロの歌の一つ⁽⁴⁵⁾」という説明に出会う。フォスター・デイモンは「最も古いアメリカのニグロ歌の一つ」であって、「おそらくはすでに忘れ去られたニグロの原曲を改作して発展させたものであろう⁽⁴⁶⁾」と推測する。今では黒人音楽の研究がある程度は進んできたので、黒人起源説はほとんど見向きもされないだろう⁽⁴⁷⁾。

「藁の中の七面鳥」のほうはダンス曲(ないしはプレイパーティー・ソングなど)として民間に伝承されたのでそれぞれにヴァリエーションがあるが、「ジップ・クーン」のほうはミンストレルの歌(曲)であるから、それほど大

きな違いはない。演奏された期間も長くはなく、次第に忘れ去られていく運命をたどる。キングマンは「ジップ・クーン」は「藁の中の七面鳥」として南北戦争以降永続してきた⁽⁴⁸⁾というが、実際は二〇世紀初頭くらいまで「ジップ・クーン」という名称が使われている。いずれにしても同じ曲が姿を変えて再登場したわけで、他の多くのミンストレル・ソングが歴史的使命を終えたことを考えるべし。一見すると「ミンストレル・ソング」ではなくなり、主たる器楽曲として今日まで命をながらえる基礎を作った、と言えよう。

- (1) James J. Fuld, *The Book of World-Famous Music: Classical, Popular and Folk*, 4th ed. (Dover, 1995), p. 591.
- (2) Claude M. Simpson, *The British Broadside Ballad and Its Music* (Rutgers University Press, 1966), p. 165 [s.v. Dargason]; Fuld, pp. 306 [s.v. Irish Washer-woman], 489 [s.v. Scotch Bagpipe Melody].
- (3) 前者については、手代木俊一『讚美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、一九九九)九三〜九八頁。後者については、Simpson, pp. 503-5; Fuld, pp. 378, 683.

William Chappell, *Popular Music of the Olden Time*, vol. 2 (1859; rpt. Dover, 1965), pp. 718-20; Hugh Keyte and Andrew Parrott, eds., *The New Oxford Book of Carols* (Oxford University Press, 1992), pp. 516-17 [「J」]は「曲の関連性」は言及しつつ「55」° Percy Dearmer et al., *The Oxford Book of Carols* (Oxford University Press, 1928), nos. 3, 18 °参照]。° “Nancy Dawson” 20 D べ聞べらなべあ (John Potter and Lucie Skeaping with The Broadside Band, *English National Songs: From Greensleeves to Home Sweet Home*, Saydisc CD -SDL 400; Jenny Bryant and Starboard Mess, *Roast Beef of Old England: Traditional Sailor Songs from Jack Aubrey's Navy*, essay² CDS001)°

(4) トマン・デム・ブーヴェは「「ペメイソング・テンイス」は「ロッカ・ローモン」の明らかなる関連曲 (obvious relative) べああ°」(Peter van der Merwe, *Origins of the Popular Style: The Antecedents of Twentieth-Century Popular Music*, Oxford University Press, 1989, pp. 46-47)° 後者の類似性については照山頼人「スコットランド民謡「ロッカ・ローモン」——主としてその起源について——」(CALEDONIA, no. 25, 1997, p. 9)° 團伊玖磨『好きな歌・嫌いな歌』(一

九七九' 文春文庫' 一九七九' 二〇二頁)。

- (5) この人物像については Dale Cockrell, *Demons of Disorder: Early Blackface Minstrels and Their World* (Cambridge University Press, 1997, pp. 92-139) に詳しくある。
- (6) Fuld, p. 591.
- (7) S. Foster Damon, ed., *Series of Old American Songs* (Brown University Library, 1936, no. 20). 54頁' この出版社の出版名はナット・ヤント・ヤントの誤訳である (Rudi Blesh and Harriet Janis, *They All Played Rag-time*, 1950; Oak, 1971, p. 86)' 誤記である。
- (8) Harry Dichter and Elliott Shapiro, eds., *Handbook of Early American Sheet Music 1768-1889* (1941 [original title: *Early American Sheet Music*]; rpt. Dover, 1977, p. 171).
- (9) Fuld, p. 591n.1.
- (10) Richard Jackson, ed., *Popular Songs of Nineteenth-Century America* (Dover, 1976), pp. 258-60.
- (11) Dichter and Shapiro, p. 205.
- (12) Jackson, p. 287; p. xiv.
- (13) Jon W. Finson, *The Voices That Are Gone: Themes in Nineteenth-Century American Popular Song* (Oxford University Press, 1994), pp. 170, between 176 and 177.
- (14) この本の挿絵は各ページに載っている。Lester S. Levy, *Picture the Songs: Lithographs from the Sheet Music of Nineteenth-Century America* (Johns Hopkins University Press, p. 23); Ken Emmerson, *Do-dahl: Stephen Foster and the Rise of American Popular Culture* (Da Capo, 1998, between pp. 160 and 161); Charles Hamm, *Yesterdays: Popular Song in America* (Norton, 1979, p. 125); 三井敏『ブレイナル・シヤンソン現象』(新潮文庫' 一九八五' 八五頁) はコミュニティー歌' Hans Nathan, *Dan Emmett and the Rise of Early Negro Minstrelsy* (University of Oklahoma Press, 1962, 1977, p. 58); Marian Klamkin, *Old Sheet Music: A Pictorial History* (Hawthorn Books, 1975, p. 73); Ruth and Norman Lloyd, eds., *The American Heritage Song-book* (American Heritage, 1969, p. 82); Roger D. Abraham, *Singing the Master: The Emergence of African-American Culture in the Plantation South* (1992; Penguin, 1993, p. 144) などである。
- (15) Dichter and Shapiro, p. 51.
- (16) Dichter and Shapiro, p. 189.

(11) 「葉の中の七面鳥の系譜」(その一)

- (17) Dichter and Shapiro, p. 189.
- (18) Constance Rourke, *American Humor: A Study of the National Character* (Harcourt Brace Javanovich, 1931, 1959, pp. 97-98) が言及するものはこの版であるが、引用は共通の歌詞の部分のみである。
- (19) たゞえば、オリジナルの「シモン・シモン」は Carl Sandburg, *The American Songbag* (Harcourt, 1927, pp. 94-97) に収録の「葉の中の七面鳥」であり、そのほか「ホラホラ・ミンサー」は収録する。カンツレートの「マナーシモン」は Benjaamin Luxon, Bill Crofut & Friends, *Two Gentlemen Folk* (TELLARC CD-84401, 1987) [CD] に収録されているが、旋律は一般的な版を採用している。
- (20) 『アメリカン・フォークソングの原点』(オーケストラ AB71) [CD] ノーン。
- (21) Dichter and Shapiro, p. 53; Fuld, p. 591.
- (22) Fuld, p. 591.
- (23) “Zip Coon: Celebrated Air” (By Nathl. Carusi; Washington, D.C., 1837); “The Crow Quadrilles: Zip Coon, My Long Tail Blue, Jim Brown, Gumbo Chaff, Dinah Waltz” (By John H. Hewitt; Philadelphia: John F. Nunns, 1837); “Zip Coon: Schottisch[e]” (By J.E. Magruder; Baltimore: Henry McCaffrey, 1860). 以下は楽譜は The Lester S. Levy Collection of Sheet Music (<http://levysheetmusic.mse.jhu.edu/>) に収録されたバージョンを引用している。
- (24) John Tasker Howard, *Stephen Foster: America's Troubadour* (Tudor Publishing Co., 1934, pp. 83-84, 120; Emerson, *Doo-dle!*, p. 55; Hamm, *Yesterdays*, pp. 206-207 [Howard の訳]; William W. Austin, “Susanna,” “Jennie,” and “The Old Folks at Home”: *The Songs of Stephen C. Foster from His Time to Ours*, 2nd ed. (University of Illinois Press, 1987), p. xxi.
- (25) Howard, *Stephen Foster*, p. 120.
- (26) Fuld, p. 591.
- (27) Cockrell, p. 99.
- (28) Sigmund Spaeth, *Read 'Em and Weep: The Songs You Forget to Remember* (Doubleday, Page & Co., 1927), p. 17.
- (29) Cockrell, op. cit., p. 95.
- (30) Nathan, *Dan Emmett*, p. 167.
- (31) *The American Heritage Songbook*, pp. 80-83.
- (32) Lester Levy, *Grace Notes in American History: Popular Sheet Music from 1820 to 1900* (University of

(13) 「葉の中の七面鳥の系譜」(その一)

という邦題)に付けられた以下のようなまったくの誤りで奇妙な解説も存在する。「この御者歌のメロデーは、元来アイルランドのダンス曲のもの。バグパイプやバンジョーで演奏され、十九世紀には代表的な黒人の歌となった。当時から黒人歌手は大衆音楽の担い手だった」(オスカー・クレア編／島岡丘解説『シングアウト(英語で歌うフォークソング集)』オックスフォード大学出版局、一九七九、二六頁)。

(48) Kingman, p. 274.

(一橋大学大学院経済学研究科教授)